

杉谷眞佐子教授のご退任に際し感謝をこめて

高橋 秀 彰

Es gibt ein Ziel, aber keinen Weg; was wir Weg nennen, ist Zögern.*

今年度をもって退任される杉谷眞佐子先生は、関西大学に着任されてから今日に至るまで35年間にわたり、ドイツ語教育の重鎮として八面六臂のご活躍をなさいました。日本独文学会では長きにわたり「文学・語学」という二分野しか存在しませんでした。杉谷先生は学会の中心的な役割を担うメンバーの一人として、「ドイツ語教育学」を新たな分野として定着させることに取り組んでこられました。その甲斐あって、『ドイツ語教育部会報』が『ドイツ語教育』と改称され、新たな研究誌として生まれ変わったのは1996年のことでした。この時期は「文学・語学・教育」の三分野体制の確立期といってもいいでしょう。教育の分野で杉谷先生は、英語圏とは違った視点を持つドイツの教授法理論を日本へ導入するうえで大きく貢献されました。最近、ドイツにおける複言語教育に関する研究を中心に取り組まれています。なかでも、ヨーロッパ言語共通参照枠やポートフォリオの日本における応用の可能性を探る研究は、ドイツ語教育の世界だけでなく、日本における外国語教育全般にとっても示唆に富むものといえるでしょう。このように進取の精神に富む杉谷先生と同僚としてお仕事をさせていただけたことで、私もドイツ語教育開拓の一端に触れるという僥倖に恵まれました。

私が関西大学に着任して間もない頃、法文研究棟を歩いていると笑顔の杉谷先生と遭遇し、「ちょうど良かったわ」と呼び止められました。共同研究を一緒にやらないかとのお誘いでした。新しい環境で自分の研究プロジェクトを軌道に乗せようとしていた矢先でしたので、時間的に対応できるか不安ではありましたが、参加させていただくこととなりました。締め切り直前に杉谷先生と何度も電話やメールで連絡を取り合いながら申請書類を作成し、関西大学重点領域研究の助成に応募し、採択されました。「EUにおける多言語・多文化主義——異文化共存能力の育成を目指すコンテンツベースの言語学習」という研究計画を、学外の共同研究者1名を含む3名で遂行することになりました。ドイツにおける2言語教育を文化的背景を交えて論じ、東欧の事例としてハンガリーを取り上げ、さらにはドイツの環境問題を題材として教材作成の可能性を模索するという幅広いものでした。複言語教育とコンテンツベースのドイツ語教材作成を関連付ける研究領域は、日本ではまだ萌芽期の段階にあり、わずか1年間の共同研究で成果をあげるために、私たちは全力を尽くしました。その成果は『外国語教育研究』第10号（関西大学外国語教育研究機構）に発表いたしました。今日まで多くの研究に引用されている

ようです。こうした研究を杉谷先生と遂行できたことは私にとって大変名誉なことで、またその成果を私たちの活動拠点である関西大学の刊行物に発表できたことはしごく幸いでした。

その他にも、2巻合わせて2500ページにもなる大著 *Deutsch als Fremdsprache. Ein Internationales Handbuch* (Walter de Gruyter) を杉谷先生と1巻ずつ分担して学会誌に書評を執筆する機会をいただきました。また、言語論、文化論の教科書として使用することを想定して企画された『ドイツ語が織りなす社会と文化』(関西大学出版部)では、杉谷先生も編著者のお一人として尽力され、私も論文と翻訳を1編ずつ掲載させていただきました。教育分野においても、学内外で開催されるドイツ語教授法のワークショップなどに、ご一緒させていただく機会が多々ありました。この分野の権威でいらっしゃる杉谷先生が、若い大学院生と競い合いながら授業で使うゲームの練習をしておられた姿は、実にチャームングでした。思い起こせば、ドイツ語教育の道を共に歩ませていただけたことで、新たな道が拓けたことに感嘆するばかりです。しかし、ニーチェがいうように、建物の大きさは離れて見なければわかりません。その足跡の本当の大きさを私たちが理解できるのは、先生が関西大学を離れられてからだと思っています。

日本におけるドイツ語教育の開拓者として、杉谷先生が切り拓いてこられた道も、カフカが言うように躊躇 (*Zögern*) だったのででしょうか。杉谷先生は、むしろ行動を通じて目的を発見しているかのようにも見えます。創造への衝動 (*Drang*) に突き動かされ、常に新しい世界に身をおかねばならない人にとって、学問的な枠組みが邪魔になることもあったのではないかと思います。杉谷先生は時に気まぐれとも思えるような方向転換をされることがありますが、衝動と理性との平衡を保つためには欠かせなかったのかもしれない。 *Zögern* は初期新高ドイツ語の *zogon* に由来し、「移動する、繰り返し行きつ戻りつする」を意味していました。そう考えると、やはり創造のための道は *Zögern* であったといえるのでしょうか。定年後の状況をドイツ語で *Ruhestand* (意味は「休息の身分」) といいますが、杉谷先生の益々旺盛な精神活動を見ると *Unruhestand* (「非休息の身分」) に入られるだろうことを私は確信せずにはられません。大学の業務から解放された後は、多方面への衝動を創造に導くために、*Zögern* の振幅はさらに複雑になるだろうと想像します。

創造の連鎖を創造することが大学人の重要な目的であるならば、私たち同僚や教えを受けた学生たちが創造的であることが、杉谷先生の功績を輝かせることになるはずです。杉谷先生が退任されても、共に歩ませていただいた道が私たちの記憶から消えることはなく、新たな創造に向けて光を発し続けてくれる贈り物として守っていきたいと思います。

注

* Franz Kafka, *Betrachtungen über Sünde, Leid, Hoffnung und den wahren Weg*, 1917-19.